弥生時代の武器

青谷上寺地遺跡からは多数の傷を帯びた人骨が出土していますが、これらの傷を負わせた武器が特定できるのは、寛骨（骨盤）に突き刺さっていた銅鏃だけです。その他の武器については特定できていませんが、人骨に残された傷痕から、薄く鋭い刃物であったことが想定されています。おそらく金属製の刃物であったことは間違いありません。銅鏃が刺さっていた寛骨には深い切り傷もつけられており、異なる武器によって複数の傷が負わされていたことがわかります。離れたところから矢を射込み、接近して刃物で切り付けるといった攻撃が行われたものと思われます。

弓矢を狩猟具とするか武器とするかの区別は難しいですが、弓矢を人に向ければ武器となります。青谷上寺地遺跡から見つかった鏃は、鉄製（１７点）・青銅製（６８点）・石製（５６点）・骨角製（７４点）・木製（１４点）と、その材質は多様です。銅鏃は我が国で三指に入る出土量を示しており、形は多様性に富んで近畿や東海などの特徴を示すタイプも含まれています。武器として流通していた銅鏃が交易によって集められたのかもしれません。

鏃以外の金属製の武器については、完全な形をしたものはなく、銅戈、鉄矛、鉄刀の破片が各１点ずつ出土しているだけです。これらは、まだ見つかっていない本体の一部が破損して生じたものなのか、金属の素材として破片が入手されたものなのかは明らかではありません。戈はほかに木製の柄と鞘が見つかっていますが、本来鞘に納まるはずの戈の形状が、破片で出土している銅戈とは異なるものです。身は未発見ですが、鞘は我が国唯一の出土例です。

盾は赤く塗られているものが多く、中には文様が描かれたもの、緑色に塗られたものもあります。ほとんどがモミの木で作られていますが、薄いため実戦に使われたとは考えにくいものもあり、儀礼の場での模擬戦に使われたものかもしれません。

多様な形の銅鏃

戈の柄・鞘、戈の復元品

朱塗りの盾

鉄矛

盾の復元品